児童養護施設職員へのインタビュー調査からみた集団処遇に関する悩みについて

鎌　田　道　彦　・　駒　米　勝　利

本研究の目的は，児童養護施設における職員の集団処遇に関する悩みについて調査を行うことである．児童養護施設職員が日常で感じる集団処遇の悩みについて，13名の施設職員にインタビュー調査を行い，インタビュー結果の分類を行った．その結果，集団処遇体制の困難さや限界が示された．そして多くの職員が，個別的関わりが重要視される児童に対して，集団処遇を行っていくことしかできない職場の人数体制があり，個別的関わりの必要性とできない現状との間に大きな葛藤が存在することが明らかになった．一方で，日々の職務の中で，個別的関わりへの工夫が見られ，職員が抱えている葛藤を維持することが，職員の日々の工夫と成長につながると考えられた．また心理職の役割として，葛藤を共有できる同業集団の形成，葛藤を工夫への準備段階としての肯定的な意味づけを行うことなどが見えてきた．

キーワード：児童養護施設，集団処遇，職員の悩み

1．問題・目的

本研究の目的は，児童養護施設における職員の集団処遇に関する悩みについて調査を行うことである．児童養護施設とは，児童福祉法41条において「乳児を除いて，保護者のない児童，虐待されている児童，その他環境上，養護を要する児童を入所させて，これを養護し，あわせてその自立を支援することを目的とする施設」（近藤，2003）とされている．藤本（2003）は児童養護施設のこれまでの役割について「役割の中心をなしてきたのは家庭の養育機能の代替であり，父母や身寄りのない子どもや家庭での養育が困難であったり，不適切な状況に置かれている子どもを対象に保護し，施設が親代わり，家庭代わりになって彼らを健全な社会の一員に育て上げていくことであった」と述べており，また近年の新しい役割として「出産や入院といった一定の期間のみを対象とした家庭の養育を一時的に補完する機能であったり，親子関係を調整する機能，地域の子育てを支援する機能などに拡大している」と述べている．施設職員の役割として，児童指導員は，児童の生活指導をはじめとし，生活指導計画の立案，内部の連絡調整，対外的な連絡調整などの職務を一般的に行い，保育士は日常生活の雑務もこなしながら，子どもの生活，遊び，学習，保健など子どもの心身の発達に直接関わるとされている．2000年に虐待防止法が制定されてから，児童養護施設に虐待の理由で入所してくる子どもも年々増えてきている．近年では、虐待を受けた子どもは入所児童の６割となっている．被虐待児の入所率の増加とともに被虐待児の心理的ケアや，職務を円滑に行うために施設職員の被虐待児に対する専門性が問われるようになっている．小笠原（2004）の調査では，施設職員が被虐待児との関わりの中で，感情をさかなでされたり，葛藤を抱えていることがわかった．そして伊藤（2003）が職員の受けるストレスにつ

いて調査を行った結果「子どもとのかかわりの中」が一番強く，次に「職場の労働条件」であった．このストレスの要因になっている「職場の労働条件」に関して，藤本（2003）では勤務システムの関係上，勤務職員１人に対し，子ども15人程度を見ないといけない過酷な現状を挙げており，個別的な関わりや個別的ケアが到底できる現状ではない．児童養護施設は，集団処遇体制である一方，入所児童の養育や入所の経緯からして，個別処遇というものが不可欠になってくる．そして鎌田（2006a）が指摘しているように，施設職員の問題意識として，子どもと個人的な関わりが持てればと思うが，勤務システム上どうしてもスケジュールをこなすことが中心となってしまい，個人的に関わる時間というのが非常に少なくなってしまうことへの悩みや葛藤が存在すると考えられる．そのため，児童養護施設で働く施設職員には集団での処遇体制に対する，施設職員の問題意識や，葛藤や苦悩が潜在すると考えられるが，実際に困っている当事者たちである現場職員の間でのみ大きな問題となっているのが現状である．そのため，集団処遇の困難さや限界，施設職員の悩みや葛藤について整理することが，この問題を考えていく上での援助になると考えられる．以上のことから，本研究では，施設職員が日常で感じる集団処遇の悩みについてインタビュー調査を行い，集団処遇に関する悩みについてまとめたい．

２．方　　法

（１）対　　象

W児童養護施設（男子グループ25名程度，女子グループ25名程度、幼児グループ13名）において勤務する施設職員13名（男性３名・女性10名）

Ａ～Ｈ：児童グループ担当職員

Ｉ～Ｍ：幼児グループ担当職員

（２）調査方法

児童養護施設で働く職員に対して，半構造化面接を用いたインタビュー調査を行う．実施にあたっては，インタビュー項目を中心としながらも，対象者の話の流れを重視して自由に語ってもらう．インタビューのテーマとしては，「集団処遇における困難性」「集団処遇における問題点」「集団処遇において思うこと」について自由に語ってもらうことにした．

インタビューの時間は一人あたり30分程度とする．インタビューについては録音機器を用いての記録を行う．また個人情報を守り，話される対象の個人が特定できないように逐語記録を作成する．

（３）インタビュー調査の分析方法

重要なインタビュー調査の内容を抽出し，カテゴリー別に分類する．

３．分類結果

①集団で被虐待児をみる困難さ

Ａ：「１対１でいる時って，虐待を受けてるとか，受けてないっていうことに関わらず，人間って割と豊かな気持ちでお互いにいられるんだけど，それがつい集団の中で一人が，例えば反

発している態度を取った時にそれと関わろうと思った時に，今度はわざと泣いたりとか，悪ぶってみたりとかして自分を見てほしいとか，自分も同じように接してほしいということで，みんなが騒ぐっていうかパニック状態になった時に沈めるにはきつい言葉だったりとか，一人一人受け入れる自分自身の体制が取れてないというか，とにかくその場を静かにさせたいとか落ち着かせたいことばかりで，虐待を受けた子は特に気を引くために優しくすればするほど泣くし，ちょっと我慢しようねって言葉で受け入れると思ったらますます泣いて甘えたりとか，それが集団になるとかなりきついですね」

Ｉ：「集団の中で，虐待を受けた子は，困らせる態度を取るんですよね．ネグレクトがある子とかはね．暴力が出たりとか，喧嘩とかかが常にですよね．怪我をさせないことを重視してみると，阻止するしかないんですよね．些細な喧嘩は見守ることもあるんですけど．蹴り合いとかも，殴り合いからひどくなってくるから，止めることが多いんですよね．だから，そういう中で常に大きな声を出したりとか．集団の中で日課を流していくうちに，大人を困らせる態度っていったらいけないんだけど，とにかく良い態度が取れないのと，悪いことをして注目を浴びることが多い．」

Ｋ：「被虐待児の，難しさを感じるのは毎日ですよね．まず，大人の言うことが聞けないのが一番．１回じゃ聞かないし，２，３回言っても聞かないんですよ．最後大きな声を出したらやっと止まるくらいで，もうほんとに，なんか大人を子馬鹿にした動きをとる．私達が偏見で見てるのかなとは思うんだけど，ほんとに一人の時は馬鹿にしてる動きをするんですよね．かえって目を盗んで，違う部屋にいっていたずらをする．おもちゃを持っていって，こそこそ遊んでみたりとか．落書きをしてたりとか．カッターとか勝手に出してる子もいるし，それがもうすごいんですよ．一人の時に，なめてるみたいな動きをするから，まず，冷静になれない」

Ｄ：「対応の難しいお子さんの中で，うまくいかなかったのが被虐待の不登校の子どもさんですね．集団生活をしてるから馴染めないんですよ．例えば時間がきて食事ですよとか，掃除をしましょうとか寝ましょうとか言ったら，まあ出来ないし，他の子どもと交わることも出来ないし，そういった子どもさんがここ何人か見てきましたけど，結局家に帰りました．」

Ｆ：「虐待で入ってきた子独特ですけど，自分の中に入り込む子に対して，他の子と比べてちょっと難しいですね．やっぱりその子中心に動いてしまうんですよね．だから，その子がずっと施設にいるから，その子と関わって少しでも会話して．担当がその子一人なわけじゃなく，周りに５，６人，自分の担当の子がいて，学校から帰ってきてもやっぱりその子中心になってしまうから，他の子までもいかないっていうんですかね．」

Ｈ：「心理の先生方に“怒らないで下さい”って言われてきてますけど，なかなかその我慢の限度っていうか．集団の中において被虐待児の心の癒しみたいなのをやっていくのは難しいのかもしれないな．その子どもにとってもかなりきついかなとか思わないでもないですね．その子もやっぱり集団の中で動かしていかないといけない時に大人だけじゃなくて，周囲の子ども達がいて，特別なことがあると，その子の動きに非常に目がいくからどうしても他の子どもが攻撃的になるんですよね」

②愛着の問題による困難さ

Ｊ：「こっちの気を引くのかは分からないですけど，注意をすればするほどダダをこねだして座り込んでみたり，物を投げてみたりとか私が実際に経験したのはちっちゃい子が多いんですけど．人と話す時は目を見て，手はひざに置いてちゃんと聞かないといけないのよっていうことから教えていかないといけないって感じですかね」

Ｂ：「自分は好きな子なんですけど，でも悪いとこがあるんで１番怒る回数も多くて，１回私がガーって怒って，でも全然反省しないようだったから，“もういい，自分で考えて勝手にしなさい”って言ったら，私がその部屋を出た瞬間にガラスを蹴って割ったんですよ．そのガラスを割るほんと１時間前くらいまでは，むこうがべったりだったんでずっと私と二人で遊んであげてて，その時に悪いことをしたから怒って，私が怒ったら，むこうが蹴っちゃったんですけど，ずっと先生が優しくしてくれたのに急に怒られたから腹が立ったんやろうねと，１対１で話した時にその子は優しい．でも子ども達の中でもうまくやっていけないというか，問題児だから多分どっちかというと嫌われてるんだと思うんですけども，でも大人との１対１ではほんと優しいんで，私は１対１を大事にしていこうというふうな指導をしようと思ってたんだけど，他の子に行ったら八つ当たりとかもあるし，そのガラスを蹴ったりとかもあったんでどこまでその子に，１対１で接していのかも分かんない.」

Ｋ：「幼児さんの場合，自分だけを見てほしいっていうのがあるんですよね．あまりにも子どもが多いわりに職員が少ないから，どうしても職員の関わりが１対５とかになりますよね．愛情注ぎが乏しいですよね．だから１対１で接すれば，話は分かるし，いい子だとは思うんですけど，集団となれば，突拍子もないことしますよね．振り向いてもらいたいために，例えば水道の流しの中に人の歯ブラシをわざと入れたりとか．そして，誰がしたのっていって自分がしたと．そしたら怒っても話してもらえるっていうのがあるんですよね.」

Ｆ：「低学年とか幼児なんですけど，とにかく一人の先生に一人の自分をかまってもらいたい．だから熱が出たとかなるととても嬉しがる．１対１になれる．一人の先生と40度の熱があっても，車で病院に行ける．でもきついんだけど１対１が嬉しい．そういうのは多々ありますね．私だけの先生，僕だけの先生っていうのは非常に感じますよね.」

③集団の相互作用によって起こる難しさ

Ｄ：「自分が自分がとかいうのがとても多いなあと感じがしていて，よく“先生，〇〇君が叩いた”とか，“〇〇君がこれした”とか訴えてきたりする．よくよく聞くと，その子の方が〇〇君をからかって叩かれてたりとか．その子の方が先に何かをしたということが多いんですけど，でもやっぱり自分がされたとか，自分がこれをされたんだよっていう主張がすごく多くって，自分がしたことは一切話さない．自分がした悪いことは言わなくって隠してたりとか，ゆくゆくちゃんと聞いてみたら実は僕もしてたとか」

Ａ：「朝などは28人を一人で見なくちゃいけない時もあるので，そういう時だったら手も足も，もうやりたい放題，周りの子への示しがつかなくて，じゃああの子がいいならじゃあ私もしたいからってなって，集団意識ってすごい早い．それまで言うこと聞いてた子がもう手のひら返したように，そっちの悪い方になびいてマイナスの渦がどんどんどんどん．歯止めがちょっと利かなくなる時があって」

④勤務形態からくる困難さ

Ｅ：「一人勤務の時とかは一人で30人近くみないといけないから，バタバタして人数が必要かなって思うんですけど，一人でみんなを見るから，ほんと家庭だったらお母さんが１人２人多くて３人くらいの子どもを見るじゃないですか．そう考えたら人一人に対して話すことも接することも施設では薄れてるのかなって思うんで，職員が必要だなあ．二人勤務の時はほんと二人の先生でするんで，一つの仕事をしてる時にこっちで遊んであげたりは出来るんですけど，一人だったらもう全部を自分でしている.」

Ｂ：「会議の日とか人が多い時とかあるんですよね．全然自分が楽なんですよね．子どもに対しても時間がいっぱいあるし，子どもと話したりとかちょっとテレビ見て一緒にくつろいで学校のこととか話してみたりとか，案外今日は全然怒らずに済んだなあとか思ったりすることがありますね.」

Ｉ：「集団の中でね，虐待を受けた子どものフォローなんて難しくて．情緒を育てるとか，心のケアなんかはね，難しさを感じてるし，日中やっぱり２，３人の中で13人をみてるから，職員の人数が少ないんですよね．それで接していく中に，集団で動かすことが常にですよね．日課の中でまわす．それが精一杯なので，一人一人子どもを見れないのが困っている.」

Ｄ：「集団でなければそんなにこちらが苛立ちを感じたりとかいうことは多分ないんじゃないかと思うんですよね．だから集団の中で迷惑をかけてることが，自分としては４年生にもなってどうしてやれないのかねっていうことで，１番頭が痛い．養護施設しか行くとこはないのかもしれないけど，この70人の集団の中にこの子がいつまでいるか分からないけど，大人も大きい子も負担だし，多分この子もすぐいつも急ぎなさい，なにしなさい，っていうことなんで，ほんとにここにいていいんだろうかとは思いますね.」

Ｂ：「６対１っていうけど，実際，約30人近くをその時間その時間一人で見ていかなくちゃいけないってことがある中で，ずっと見れないですよ．そこで被虐待児っていうのも本当にありますし，十分な対応出来るかっていったらほんと出来ないですよ．日頃の生活の上では申し送りがありますからね．そういったところで問題傾向のあるような子どもの引継ぎをやって，それを遂行していくぐらいしかもう時間的な余裕はないですよ.」

⑤個別的関わりの必要性とできなさの葛藤

Ｄ：「個別に関わる時間がほしいなあとは思ったりする子もやっぱり時折いるんですよ．全員が全員少しずつ同じ１対１で関わる時間があればいいなあとは思うんですけど，やっぱり集団の中で生活していると日課で終わってたりとかするんですよ．話をする間もなくだ～と流れて，特に何も問題がない時とかですね．何かあると自分も今日この子と話そうとか思ってると話して終わったりするんですけど．誰かとちゃんと話したかなとか思ったりする日もあるので，別に話せるような機会が少しあると怒らずに済むけどなと思ったりしますね.」

Ｆ：「１対１で遊んであげたいなあっていうのはすごいあるんですけど，１人遊んでたら僕も入れてって寄ってきますよね．そうなると，自分が望んでるのは本当は１対１でこの子と時間を過ごしたいんだけど，なんかみんなが入ってきてっていうのも，１対１の関係が出来てないのはすごく感じるんですよ」

Ｇ：「集団の中の子どもの年齢も違ってくるからですね．集団で動くって，かなり上と下のギャップがあるから子ども達に負担かかってくるっていうのは私達は十分理解はしているのです

けど職員の体制とかでどうしても一緒に動かないといけないってなった時に，レベルを下げたり上げたり，中間に合わせたりするんで，子どもにも負担だし，大人にとってもああこうしてあげたいなっていうのはストレスとして，ここまでしてあげられるのにみんながいるから出来ないなっていうのは感じてる悩みです」

Ｌ：「その状態に応じて子ども達に，状態の悪い子にはなるべく，声かけたりとか目をかけたり気を配ったりとかしてますけど，いい時にはそのいい状態を保ってあげたいから，それをがうまくいくようにぐらいの声かけしかしてないんですけど，１対１っていわれればどうなのかなって思うですけど．一言声かけたり大人がちょっと寄り添うだけでも子どもは満足してる部分もあるのかなって感じる時はあるんです。でも，なかなか１対１の時間を作るっていうのはもう今100パーセント不可能に近い状態ではあるとは思うので，もう昼寝の時に横でこう添い寝している時ぐらいじゃないですかね．でもそれも小さい子から順番になりますけど．個別に関われるのは病院に出た時に２対１くらいですね.」

⑥現状でできる対応・工夫

Ａ：「一人勤務っていうのは大体子どもも“今日午後勤の先生だね”とかよく言ったりしてるんで，結構把握してる部分もあるんですけど，お風呂入れないけといけないけど，これもしないといけないと思った時は中高生が“先生お風呂入れてやるから先生他のことしといていいよ”とか言ってくれたりするんで，中高生の存在が助かったりもするんですけど，だから向こうから別に何も言ってこない時とかには今日お風呂入れてもらっていいかなとか言ったり，洗濯物干すのも大量なんで子どもに“洗濯物干してくれる人”とか言ったらみんないやいや“は～い”とか手上げたりするんで，よかったーとか思ってみんなで済まして，それで話したりとか色々出来るんで」

Ｃ：「職員の表情を見たりとかね．カッかしてるんやったら，カッかして子どもと接して，ちょっと横から入ってあげたりとかそんなことぐらいしか出来ないですよね．でその担任がこの言葉をいえば，子どもとの関係が崩れるとかいうこともあるんですよ．だからそれは私が代弁したりします．例えば子どもに注意をする時とかですね．なかなか大人のことを信用してないから，最初の段階としたら，大体なんでもかんでも子どもの欲求は受け入れるような形でしか．まずその担任と子どもが関係作りをしてる時に，自分が叱る存在になるとかいうサポートはします．職員と申しあわせて，じゃあ今日自分が叱るから，じゃあ後はあなたがかばう役になってくれとかも時々はあります.」

Ｅ：「子どもに指導する時，その子と自分の周りに他の子どもがいるんですよね．人の目も入ってるから，自分がちょっとカチンとなるんですよね．人の目も映って，１対１になると，意外と冷静でいられるかなっていうのは自分の中であるから，その子を連れて別の場所に移動するっていうのはまずしますね.」

Ｈ：「子どもとこじれた時にじゃあどうそれをほぐしていったりとかっていう時に周りの職員の助言だったりとか，本当はこの先生こういう意図じゃないよとか，こういうことでじゃああなたが悪いやんとか，第三者がいろんな方がそれぞれの立場でその子に言ってもらえるのでこれは施設として組織がきちんと出来てるのでそれはとても勤めてる上でとても嬉しい」

Ｆ：「うまいこと声をかけて，手伝ってもらう．特に小さい子なんですけど“よく頑張ったな”というと，小学生は特に敏感に反応するんですよね．その後の動きもさらにどんどん良くな

っていくんですよね．だから小学生は基本的に，褒めるようにはしてますね.」

B：「今日はだいたい顔色とか動作とかでああ調子が悪いなあとかっていうことを感じた時には一応なるべく学校の様子を聞いたりとか，からだの調子がいいとか悪いとか聞いて，なんか本人の精神的なものがあるのかどうか．その上でやっぱり色々個人的に話っていうか一般的な話をする中でどうしたんっていうことで話しかけたりはするようにはしています.」

G：「この子はもう時間内に出来ないって子ってもう割り切っていくしかないなあと．今までは型にはまって，この子は時間内に絶対させなくちゃいけないって思ってたんですけど，いいや出来なくても，この子は．と思ったらちょっと怒る回数減った.」

D：「今施設は一人部屋なので消灯の時や学習時間に，部屋に入ったら１対１になる．そういう時間も使ってみると，結構いいかなあとか思ったりはしますね．小さい子にいつもついているんですけど，大きい子の部屋にたまには入って勉強しながら話をしてみたりとかすると，１対１で話せたりとかする」

４．考　　察

インタビュー調査の分類結果を中心に職員の悩みについての考察を行う．まず，集団処遇を行っていく上で「①集団で被虐待児をみる困難さ」がある．集団処遇を行っていく上で，施設職員は集団の統制を図らないといけないが，集団行動を身につける以前に個別対応を重視しなければならない被虐待児がいる．被虐待児への心理的ケアを行うことの重要性は，職員は研修を通じて学んできており，よくよく理解はしているものの現状で行うとなると難しい．そして被虐待児は虐待体験の影響から，人間不信や試し行動など，対人関係イメージが歪んでいるため，集団をかき乱したり，職員をいらだたせるような対人関係パターンが身についている．そして，職員の感情が揺さぶられて，職員が落ち着いて集団処遇ができず，個別対応ができなくても落ち着いた安心できる関わりを必要とされているが，逆に叱る場面が増えてしまう悪循環に陥る．また職員が被虐待児の子どもに労力や時間が奪われ，他の子どもへの関わりや処遇がうまくいかなくなる．伊達（2008）は「非虐待児が多くなれば、それだけケア現場は子ども間の頻回なトラブルに悩まされることになる」と述べているように、問題のある児童にばかり構われることになることで，他児がそれをみてその児童に対して攻撃的になるなどの悪循環がある．

次に「②愛着の問題による困難さ」が挙げられる．児童養護施設への入所に関しては，養育者との関係に問題があり，同居困難である家庭背景がほとんどである．そのため，どの児童にも養育者との愛着の問題が大きなテーマとなっている．そこで，代理の養育者としての施設職員が子どもにとって重要な他者になると考えられる．しかし集団処遇や職員対児童の比率が６対１，実際には12対１であるため，児童は養育者としての愛着形成の対象となる施設職員とは，十分な愛着を形成するための関係を持てない．子どもは愛着関係を希求し，職員もその必要性を感じているが，十分に接することができない．子どもは愛着関係が全く満たされないために，いろいろな行動化を起こす．そして悪いことをして怒られると満足するなど歪んだ関心の引き方，集団での処遇が困難になったり，児童間での愛着を求める争いが日々起こっている．

また「③集団の相互作用によって起こる困難さ」も出てきている．集団では集団を維持するための枠組みと規制が伴われている．その中にいる子どもは，枠を破りたい気持ちと，守らないといけない気持ちの両方が存在すると考えられる．その中で子どもは自分の気持ちをコントロール

しながら集団生活に適応している．しかし，その中の一人が規律から外れた行動を取ると，コントロールしている気持ちが揺らぐ．その時に，規律を管理している施設職員が歯止めをかけられなくなると，制御していたものが外れてしまい，集団がエスカレートしていき，集団規範は内側から崩れてしまう．児童養護施設のように施設職員が少なく体制が薄いと，突発的な枠破りに対する耐性が弱くなる．そして，対象関係が安定していない子どもがたくさんいる児童養護施設では，少人数の職員体制で，集団の統制を維持していくことは難しいと考えられる．

上述した３つの困難さの根底に「④勤務形態からくる困難さ」がある．職員の配置基準は児童６人に職員１人であるが，実際の勤務は，６対１で24時間行なわれるわけではない．そのため，実際は，児童12人に職員が１人となり，日によっては，24人に１人という体制も起こりうる．そうすると，愛着対象が喪失していたり，虐待を受けていたりなど，実際個別処遇が必要な子どもばかりであるが，処遇を行うだけの表面的な関わりに時間が削がれており，本当に必要な面での関わりが持てない状況である．

そのため職員には常に「⑤個別的関わりの必要性とできなさの葛藤」が存在している．職員は入所している子どもこそ，個別の関わりが必要だということを，日常の子どもの様子からよくよく体感している．集団処遇のみに追われ，個別処遇の時間がないこと，余裕がないこと，体制的にも不可能であることで，“したいけどできない”葛藤を抱えている．仮に個別の関わりを作れたとしても，すぐに他の児童が入ってきて，その子どもとの関係が安定しないなど，個別的関わりが必要だけど，実際にできない現状のもとで，常に葛藤を抱えており，不全感を持ちながら，集団処遇を行っている悩みがある．

黒田（1997）は児童養護施設の課題として，ストレスが強く，アイデンティティが揺さぶられ，職員によっては早期に退職をしたり，バーンアウト，無気力など，定着率の悪さを挙げている．また伊藤（2003）が職員の受けるストレスについて調査を行った結果「子どもとの関わりの中」が一番強く，次に「職場の労働条件」であった．「職場の労働条件」は，労働条件の過酷さもあるが，個別対応をしたいができない葛藤がストレスとなっているかもしれない．「自分は子どもが好き，子どもとの愛称がいい」という保育士を選択した際の思いや子どもとの相性がいい資質は，子どもとの安定した情緒関係を結ぶ個別的関わりの中において充足または開花されると考えられる．しかし，保育士の職業を選択した際の思いや，保育士を選んだ際の本人の資質が集団処遇という体制によって発揮できず，また子ども側の対人関係イメージの歪みなどによって，安定した情緒関係を結ぶことが困難であり，それをストレスと考えたり，アイデンティティを揺さぶられ，早期退職などの定着率の悪さにつながっていると考えられる．よってこの問題は子どもの養育という面だけでなく，職員のアイデンティティや定着率の問題などにも関係していると考えられる．

そこで施設職員は個別対応が困難な中でも「⑥現状の中でできる対応・工夫」を試みている．現在の体制で，できる工夫として，職員の人数が少ない時に中高生に業務を手伝ってもらったり，任せたりしている．人間は何か自分が役立っているという感じが支えになることもあり，そういった点で，何か役に立てている感を持てていることがその中高生のサポートにもなりえる．そして，職員から感謝の言葉をもらったり，褒められることが，健全な自己肯定感を育てるのに役に立つかもしれない．しかし，子どもが無理をしてしまっている場合があるので，その点については注意を払わないといけない．次に集団処遇が基本であるため，個別対応ができないことの問題意識や悩みがあるが，昼寝の時間に，特定の子どもと過ごす，消灯後の個室での対話，いつも全

体を気にかけておくことで，気になる子どもがいたらなるべく話しかけるなどの工夫を行っている．このような活動をさらに膨らましていくためには，職員が常に１対１が必要だということを意識して業務を行っていることが重要となる．常時，意識をしていれば，いつでもその時の状況に応じて工夫を行い，個別対応や１対１の場面をできる限り多く作ることができると考えられる．つまり，現在，職員が抱えている葛藤を維持することが，職員の日々の工夫と成長につながると考えられる．そのため，葛藤を共有できる同業集団の形成，葛藤を抱えることが次の工夫への準備段階であるとの肯定的な意味づけを行うこと，などが心理職の役割となるかもしれない．既に行われている組織の連携として，児童との関係を維持するために，指導する役割，サポートする役割など，指導員が父親的な役割を取り，保育士が母親的な役割を取って，愛着の問題に取り組んでもいる．

最後に，鎌田（2006b）が行っているアプローチとして，専門的な視点を取り入れながら職員と子どもの関係性を深めることで，情緒的な安定感，職員との信頼関係が増し，職員の関わりにも変化が生じ，子どもの内外的環境の向上につながるであろうと考え，改めて子どもと職員の特別な時間を設定するため，プレイルームを活用した職員と幼児との個別的な関わりの時間を保育支援の中に組み込んでいくことを企画している．このアプローチは，愛着の問題，職員のアイデンティティの問題，集団処遇の中に個別処遇の導入の問題に役立つであろうと考えられる．今後の課題として，上述したような問題に取り組むアプローチを展開し，その効果について検討することが挙げられる．

文　献

伊達直利「児童養護施設の養育環境と援助過程」『こころの科学137－児童福祉施設－』30-35，2008.
市村好弘「児童養護施設の今日的役割」『月刊少年育成』48(2)，22-28，2003.
伊藤嘉余子「児童養護施設職員の職場環境とストレスに関する研究」『社会福祉学』43(2)，70-81，2003.
鎌田道彦「児童養護施設での臨床活動に関する一考察」『仁愛大学附属心理臨床センター紀要』創刊号，40-45，2006ａ.
鎌田道彦「専門家外がプレイルームを活用する意味について－児童養護施設における子どもの内外的環境の向上のために－」『日本心理臨床学会第25回大会（口頭発表）』2006ｂ.
近藤亜矢子「児童養護施設はいま」『月刊少年育成』48(2)，16-21，2003.
黒田邦夫「子どもと大人の人権が共に守れる「基準」の実現を　（特集　児童福祉法改正と養護施設最低基準の改正を考える）」『児童養護』28(2)，11～14，1997.
小笠原洋「児童養護施設職員が抱く心理的課題に関する研究～虐待を受けた子どもへの対応と関わりについてのインタビュー調査を中心として～」『東亜大学大学院修士論文（未公刊）』2004.
藤本勝彦「児童養護施設の今日的課題」『月刊少年育成』48(2)，8-15，2003.
全国児童養護問題研究会（編）『児童養護への招待－若い実践者への手引き［改訂版］－』ミネルヴァ出版，1999.

付　記

インタビュー調査のご協力をいただいた児童養護施設の先生方に感謝いたします．また本研究は平成17年度仁愛大学共同研究費および平成18年度仁愛大学共同研究費の助成を受けて行った研究の一部である．